

「私の原稿は手書きで縦書きです。なぜなら、横書きの文章の場合は全部を否定するように（ちがうちがうと）首を振って読まれるが、縦書きの文章は一行一行納得するように（そうだそうだ）と頷きなら読んでもらえるからです」とユーモアを交えて言った作詞家がいた。2007年8月1日に70歳で亡くなった阿久悠（本名・深田公之）さんだ。これは単なるジョークではなく、私たちがものを書いたり話したりするときの姿勢、さらに、生きていくときのあり方に関わるヒントであるようにも思われる。

最近、日本人である私にとっても万年筆で縦書きの文章を書くなどはまれになつてしまった。そういえば、「ペンだこ」という言葉も最近では聞かない。それでも「万年筆の似合う著名人」の一人に選ばれた女優が、「肉筆の手紙」で受け取ると心が温まりますよね。万年筆は手間暇かかるところが好きだし、愛着がわき

「効率」と「非効率」の間で



ます」などと感想を述べているコラムなどをみるとホッとします。確かに、現実の生活では効率的でスピード感のある文章が必要とされる場合も当然あるが、じっくりと考えられ、推敲に推敲を重ねた文章が要求されることもある。特に、単なる伝達事項ではなく、重要な案件に関する相談とか提案とか依頼とか謝罪などの場合には、できるだけ「手間暇かけて」言葉にする、という作業が要求される。そうすることによって言葉に心が込められていくのであろう。その過程で、書き手自身が精神的に鍛えられたり、事真相が見えてきたりするのだらう。その結果として言葉が相手に「通じる」ことになるのである。非効率的であると言えれば言えるが。

以前、NHKラジオで耳に挟んだ「言葉の話」。「今日のテスト、全然わからなかったから、白紙」で出しちゃったよ」と中学生が言うときの白紙を「白い紙」

と言い換えることはできない。役所に提出する用紙についても記載項目は印刷してあったとしても必要事項を記入していなければ「白紙のまま」になっていると言う。「安物」と「安いもの」の違いも同様。騙されて買わされてしまった偽物の場合は「安物」をつかまされたと言い、いい具合によい品に出会った場合は「安いもの」を首尾よく手に入れた、となる。「古新聞」と「古い新聞」についてはどうか。古新聞はもう役に立たなくなつて廃品回収に出されるゴミであるが、古い新聞は貴重な資料という意味を場合によっては持ち得る。1900年00月00日に何があつたか教えてくれ、という依頼の場合は、古い新聞を探しに資料室に行く、といったような具合だ。

私たちは日々、いろいろな書類、資料に取り囲まれて生活している。その中には目を通すだけで処分しても構わないものもあれば、大切に保存し、時折取り出

市瀬 英昭 ● 南山学園理事長

して読み返さなければならぬものもある。さらに、慎重に扱って返事を出さなければならぬものもある。その見極めが大切となつてくるようだ。コミュニケーションの手段にしても、一昔前までは、電報、速達、封書、はがき、絵ハガキといった順に、重要度が外観で判断できた。現在では非常に重要な情報からジャンクメール、振り込め詐欺のようなものまで同列に並んでパソコン画面に出てくることもある。重要度の見極めが問われることになる。便利な世の中になつてかえつて忙しくなつたとの声が聞かれるのも頷ける。このような時代、いろいろな課題に直面するとき「判断の根」を持つことが必要なのであろう。効率を軽視せず、効率に支配されないために。